

3 「ポイント」は見えてきた?! あとは、それを、どのように実現していくかである！

堂本 彰夫

(1) 「多様性」と「対話」！それが、これからのは「キーワード」?! だが、それには、もう一つの要素が必要！

またしても、「いじめ」や「不登校」の数が、過去最高となったようである（一昨年度実績）！この調子だと、これからもずっと、過去最高を記録していくかもしれない？そんな危惧（諦め？）が、ある意味当たり前のようにも思えてくる！しかし、当然、それを、何とか食い止めなければならない！関係者／当事者達は、日夜そのためにも頑張っているのでもあるから（そう思いたいということである？）、なおさらである！ただし、やはり、ただ頑張っているだけではどうにもならず、そこに、明確なヴィジョンと解決方途が準備されていなければ、それこそ「徒労」や、たとえ一時期うまくいっていたとしても、結局は「打ち上げ花火」や「看板倒れ」に終わってしまう（一部の関係者の自己満足に止まるということ！）?! そして、いつしか気力も薄れ、元の木阿弥状態となる?! まさに、そんな光景を、一個人ではあるが、多々見えてきたようにも思う！

それでは、改めて、これからのは「教育」、とりわけ「学校教育」を、どのように変えていけばよいのか？かつて「生涯教育（学習）論」が唱えていたように、最早近代学校制度は、その限界を迎える、新たなあり方が模索されてきたとも言えるが、残念ながら、今だもって、その有効な姿・形が実現しているとは言えない?! 子ども達はともかく、何よりそこで働く教職員達が、心身共に疲れ果て（病休や離職者の増大等）、その困窮度は、最高潮に高まっているとも言える！そんな中、次なる学習指導要領の改訂作業が始まっているが、その基本コンセプトは、「学び方の自由度を高める」、「授業時数や学習内容の学年区分について弾力性を持たせる」ということであるようであるが、そこにあるのは、「多様性」と「対話」の重要性であるとも言われている?! だが、果たして、それだけでよいのであろうか？

ここでは、私自身の、そのことに関わる見解は、ひとまず置いておくことにして、先日目にした、興味深いネット記事を、まずは紹介しておきたい！そこには、大いなる示唆があるということであるが、それは、「九州初の『学びの多様化学校』立ち上げにかかわった文部科学省職員・上田棕也さんインタビュー」というものであるが（講談社コクリコ／「学びの多様化学校」連載4回目）、「自身の海外経験から注目したイエナプラン教育と、日本の学校が抱える課題、これからは教育が進むべき未来について」というタイトルがついていた。「九州で初めての『学びの多様化学校』として開校した、大分県玖珠町の『くす若草小中学校』。町の教育長や、初代校長とともにその立ち上げを支えたのは、文部科学省から教員として赴任していた上田棕也さんです」とあった。

記事の趣旨としては、「学校づくりの核として、対話を重視したオランダの教育法『イエナプラン』の理念を取り入れた背景には、上田さん自身が日本の学校教育に抱いていた強い危機感がありました。学びの多様化学校は、これからは公教育のスタンダードになるのか？日本の教育が今まさに直面する課題と、進むべき未来について伺いました」とあるが、私が着目したのは、「今は不登校の子どもたちの最後の砦のようになっていますが、やはり公立学校全体が変わらなければいけません。多様化学校は、そのトライアルとしての役割を担っていると思います」という、その上田氏の言であった！「実際、次期学習指導要領では、学び方の自由度を高めたり、授業時数や学習内容の学年区分について弾力性を持たせようという議論も上がっています」ともあったが、予め、結論を述べれば、それは、何も「多様化学校（特別支援学校）」にだけ、採り入れられるべき理論ではないということである！

(2) 「学びの多様化学校（不登校支援）」が示唆するもの？だが、繰り返すが、本質を見誤ってはいけない！

その前に、少し、上記「イエナ教育（プラン）」について触れておきたい。それは、「ドイツのペーター・ペーターゼンが、1924年に大学の実験校で創始した学校教育。子どもたちを『根幹グループ』と呼ばれる異年齢のグループにしてクラスを編制したことによる大きな特徴がある」とされるが、それを、現在導入している（オランダで拡大し、我が国にも、一部波及している！）、長野県の佐久穂町の大日向小学校・中学校（私立）では、「誰もが、豊かに、そして幸せに生きることのできる世界をつくる。」を、建学の精神として掲げているようである。これは、「すべての人が『個』として大切にされ、それぞれの違いを認め合い、互いに協働することを通して世界平和に貢献する、自由と責任のある共同体を作っていく」という思いがこめられている。すなわち、『自立する』『共に生きる』『世界に目を向ける』の3つを『大切なこと』としている」ということらしい！

さて、もちろん、これが、この学校にとって、非常に重要な目標であることに異論はないが（むしろ、個別には激賞すべきものであるが！）、問題は、果たして、それだけでよいのかということである！要は、繰り返

すように、それによって、一部の（冷徹に見ればそうなる！）子ども達は救われ、それまでの嫌な？学校生活から解放されるかもしれないが（確かにこのことは、緊急対策として必要であり、その限りにおいて推賞されるべきものではあるが！）、子ども達の「いじめ」や「不登校」の問題は、そうした新しい形の学校の創設だけでは、到底解決出来ないものであり（その限りにおいては、いわゆる「多様性」や「対話」が実現されるにしても、それは、限定された「多様性」や「対話」ということになる！）、そもそも、地域社会全体における学校の位置付けや役割を、新たな形で模索していかなければ、通常の学校、そして、それが存在している地域社会全体にとっても、誤解を恐れずに言えば、決して喜ばしい施策とはならないのである！それを、一部の子ども達や学校だけの問題に、矮小化するなということである！

要するに、緊急避難的な措置と将来を見据えた、まさに骨太の哲学とヴィジョンが必要であること！そして、それは、ひとづくりと地域づくりの好循環のなかで実現されなければいけないということであるが、（公立）学校は、それぞれの地域社会の重要な構成員であり、その地域での役割が期待されるのである！子ども達は、それによって、そこで学ぶ（生きる）意味を見出し、エネルギーを蓄え、成長していくのである！だから、特別な場所に囲われる（庇護される）ことだけで終わってはいけないのである！とは言え、「学びの多様化学校」の示唆するものは、現実的には極めて大きいことは言うまでもない！それは、次のような、記者からの質問に答えている上田氏の言に、いみじくも込められている？！

学びの多様化学校の取り組みは、これから学校のスタンダードになっていくのでしょうか？→上田さん：そうですね。不登校の問題をはじめ、今の学校には課題が山積みですが、玖珠町の梶原教育長はいつも「ピンチはチャンス」と言っています。僕もこの状況は、日本の教育が生まれ変わるためのチャンスだと思っています…日本の学校は画一的だとか抑圧的だと批判されることもありますが、日本ほど先生が生徒指導に熱心な国はありません。家庭環境や友人関係まで気にかけ、子どもの表情の変化を見取り、心に寄り添う姿勢はどの国の先生にも負けません。それは、民主主義の学校をつくる上でかけがえのない財産です。子どもたちの多様性を認めていきたいという思いも、すべての先生の根底にあるものだと思います。先生方が本来持っている子どもたちに向き合う力や、教育者としての思いを存分に發揮できるように、老朽化したシステムをアップデートするときが来ているのではないか。

（3）先駆的な取組みは至るところにある！そしてそこに、求められる姿・形が顔を覗かせてもらいる？！

まさしく、その通りなのである！ただし、こうした考え方や実践は、これまで、まったくなかったのかと言えば、決してそうではない！実は、大いにあるのである！ここでの論稿では、そのうちの幾つかを、不定期的ではあるが、私なりに紹介もしてきたが、残念なのは、こうした取り組みが、全体としてのゲームチェンジャー（ちょっと軽薄かな？）となっているのかと言えば、まだまだ、そうはなっていないのではないかということである！と言うのも、それらの取組みは、個別バラバラのそれで、まさに、全体を示すグランドデザインとして提示されてこなかった（否、そう認識されてこなかった？）ということであるが、一方では、過疎や災害復興、あるいは少子高齢化に伴う学校の統廃合の問題、そして、いじめや不登校対策というような形（目的）で、それぞれが、別個に捉えられてきたきらいがあるということである？！

しかも、さらに残念なことは（敢えてこう言わざるを得ない？）、それらが、いわゆる「コミュニティスクール」の導入に、直接関わらされて論議されてこなかったことである？！それはそれで、当該地域にあっては、まさしく緊急かつ重要課題であるので、そのこと自体を、とやかく言うことは出来ないが、だが、もうそろそろ、こうした先駆的な取組みから、すべての学校教育に汎用できる哲学やヴィジョンを紡ぎ上げることは出来るであろう？！否、出来るはずである！例えば、長野県泰阜村（「グリーンウッド自然体験教育センター」）や島根県海士町（隠岐島前高校／隠岐の国学習センター）の取組み、さらには、東京都渋谷区（「探求型学習「しぶや未来科」の、しかも午後の実施）や品川区（全校に「学校地域コーディネーター」配置／区独自の教員採用等／「働きたい学校」づくり）の取り組み等は、その意義と可能性を、大いに示しているものと言える（他にも、好事例は多々あると思われるが、ここでは、思い出すままに記しているに過ぎない！）？！

だが、いずれにして、そこには、一週間、一学期間、一年間というようなスケジュール枠のなかで、時間も、資源も、そして人も、限りある現実故に、「多様性」と「対話」を保障する時間と場所が、なかなか確保できないのである！だから、人、モノ、コト、カネの統合的な絡み合いを創り出していくことが必要なのである（そうしなければ実現しない！）！だから、学校教育と社会教育の交わりと有効関係が築かれていく必要があるのである！詳しく紹介出来ないのが残念ではあるが、上記の取組みには、図らずもそれが、たとえ部分的であっても（もちろん、それぞれに、その地域特有の課題に対処するためであるので、そのこと自体は責められない！）、実現されているのである！ちなみに、それを、最初から期待できるものが、実は、「コミュニティスクール」だということでもある！そこでは、「ひとづくりとまちづくりの好循環」が図れるということである（「地域おこし協力隊」や「独自のコーディネーター」の採用等も考えられる！）のである！（つづく）